

# 《三井寺》の周縁

大阪学院大学非常勤講師 恵阪 悟

《三井寺》は、京都清水寺の観音の夢告により三井寺を訪れた女が、鐘を撞くことを機縁として同寺の僧となっていたわが子が再会するという、母子再会を描いた物狂能の佳品で、世阿弥の芸談を息男元能が書き留めた『申楽談儀』に、

近比、將軍家御前にて、人（三郎也）の、鐘の能をせしに、南向き成に、鐘を右の方に置く。左鐘に撞きし也。幾度も、左に置きて右鐘に撞くべし。

とある「鐘の能」が同曲のことと考えられているが、確定的ではない。その成立と作者をめぐっては、作品分析を通して、竹本幹夫氏が南北朝末期以降の成立と考え得る古作、香西精氏が世阿弥の甥で右の記事に名が見える三郎元重の関与、伊藤正義氏が世阿弥周辺にいた人物の習作、三宅晶子氏が世阿弥の息男元雅の可能性あり、大谷節子氏が世阿弥の女婿禅竹の可能性ありとする説をそれぞれ提示しておられる。いまこれら諸先学の研究に基づきつつ、成立と作者の問題について述べる用意はないが、「鐘の能」と《三井寺》をめぐって少し気になるのは、足利將軍家と三井寺の関係である。

足利將軍家と三井寺は、『太平記』巻第十五「園城寺戒壇事」にあるように、初代尊氏が新田義貞との合戦に備えて手を結んで以来のつながりがあり、室町幕府を開いた後の貞和三（一三四七）年には、合戦で荒廃した寺内に、尊氏によって金堂と新羅善神堂が再建されている。以降の歴代將軍も三井寺との関係は深く、『園城寺文書』第二巻によれば、たとえば、年末詳六月二十日付の「足利義満書状」には、

自三井寺進物賜候畢 能様可被伝仰候也 恐々敬白

六月廿日（花押）

御報

などであるように、両者の親密な関係を窺わせる書状が残されており、この他にも義詮や義満の寄進状および寺領安堵の書状、義持・義教の御教書が伝存している。

また三井寺は、その鐘について、アイのセリフに「背東大寺、形平等院、声園城寺」とあるように、東大寺・平等院の鐘と並べ称され、後には「三井の晚鐘」として近江八景の一つにも数えられるようになる名鐘を有する寺として著名であるが、この鐘には『寺門伝記補録』第七に、

時太湖龍神感喜其英雄、一日延誘秀郷入于勢多龍城。客主座定而後、主神調内海珍奇、饗於客。又其及去、主神与之以数品重宝。此鐘其中一也。

と、依藤太秀郷が龍神から得たとする伝承が載せられている（『太平記』巻第十五「三井寺合戦並当寺撞鐘事 付依藤太事」にも類話がある）。さらに右の『寺門伝記補録』には、この鐘について、

又将有吉事時不撞自鳴。建武中將軍尊氏倚当寺。山徒乘時来寇。寺衆恐賊徒取掠、以鐘匿埋於地底。鐘在地中時鳴。従是將軍之軍、日得勝利。

のように、鐘の奇瑞によって尊氏が合戦に勝利したことを記している。

これを要するに、將軍御前で演じられた「鐘の能」は、將軍家と

所縁深く、また初代尊氏にまつわる伝承を持つ著名な鐘を有する三井寺を舞台とした能《三井寺》と同定するに由なしとしないということである。一つの試論として提示したい。

さて、《三井寺》のワキの出立について、江戸末期写の福王流協所作付『協所作附』（関西大学図書館蔵）に

僧脇ニ小サ刀サスハ、三井寺・関寺・道成寺三番二限ル秘事アリ。近代三井寺ニサ、ス。但し、サス時ハ習多シ。水衣モ替ル。小サ刀サストキ、モヘキノ衣着ス。

とあり、また江戸中期頃の内容を持つ高安流協所作付『鶯永集』（法政大学能楽研究所蔵）の《関寺小町》に、

但シ僧ワキニ少刀サス、道成寺・関寺・三井寺三番也。口伝。

とある（引用には適宜句読点を補った）。現行のワキ出立は、観世流と喜多流の謡本前付を見るかぎりでは、前者には小刀の記載がなく、後者には記載があり、両様らしい。

この《三井寺》ワキの出立は、室町末期から近世初頭の演出資料では、着流の場合と大口を着る場合があり、『盛勝本衣裳付』には着流の出立（せき寺のごとし）とあり、『関寺小町』には「常の出立」とのみあって、これだけでははっきり分らないが、たとえば《通盛》に「ワキ、僧、常の出立。大口キヌワキ也」とあり、「常の出立」が着流であると分かる）が、『福王流古型付 一』には「大口、水衣、すみぼうし、珠数、あふぎ持」のように大口出立が記される。また同型付には「三井寺」「かうやものぐるひ」のワキに、かたなサス事有り」の注記もある（以上、引用資料は『福王流古伝書集』による）。同じことが下間少進伝書『童舞抄』（『下間少進集』I所収）にも見え、「水衣。大口。刀。扇持。数珠。また白衣にても不苦」と、大口出立と白衣（着流出立）を併記している。もっとも『童舞抄』の書きぶりは、着流が本来であったと思わせ、

小林健二氏が「三井寺絵巻考」で紹介された室町末期の作と推定される絵巻の挿絵には、着流のワキが太刀持ちのアイを伴った絵図が描かれてもいる。つまりは、もとは太刀持ちを伴い着流出立であったものが、大口出立に小刀を差す出立に変化した、それが先に引用した《三井寺》のワキ出立に関する秘事口伝を生み出すきっかけになったわけであるが、肝心の秘事の内容がよく分からない。『別冊太陽』道成寺』では、『道成寺』のワキの出立に関して、「このワキは金襴の角帽子、白練りの着付けに、最高位の色である紫の装束。小刀まで帯びた第一礼装である。これは道成寺の寺格の高さではなく、能の「道成寺」の位の重さゆえである」と解説しているが、これは《関寺小町》にも当てはまると思われ、両曲の秘事は曲の位の重さに関連することと想定できよう。しかしながら両曲に比して、『三井寺』の位がそれほど重くとは思われない。江戸期の諸流の書上を見ても、『三井寺』を習い物とする流派はない。

では『三井寺』の秘事とは何であろうか。思うにこれは、『道成寺』や『関寺小町』の反対を行き、三井寺の寺格の高さを表現することと考えたい。三井寺は智証大師円珍を中興とする天台宗寺門派総本山で、東大寺・興福寺・延暦寺とともに本朝四箇大寺とも総称され、道成寺や関寺との寺格の差は歴然である。その三井寺僧がワキであることを、小刀を差すことで表現しようとするのが、この秘事のねらいであったろう。『福王流古型付 一』に、『高野物狂』のワキに小刀を差す場合があることを注記しているのも、三井寺と同様高野山の格の高さの表現というわけである。

以上、『三井寺』の本筋からはずれ、筆者の興味ある問題に終始したが、装束や小道具にも、作品世界を表現するための多くの工夫がちりばめられているのが能である。その工夫の一端を紹介しつつ、いささか私見を述べた次第である。